(14) 一橋経済学会記事

一橋経済学会

○第四例会、九月十四日午後一時より学生集会所第一番室に於て本会第四例会を開く。関先生、石川先生、上田先生を始め三十余名の来会あり。先づ石川先生は「株式会社の企業に就て」なる題下に一場の講演を試みられ（本講は本誌上に紹介せり）、次で専攻部一年松浦要君起ちて「価値の実在に就て」の真摯なる研究の結果を発表せらるゝありしも、不幸にして同君所用の為め時間十分ならず、僅かに其の一小部分の講演を試みられたるのみにして大部分は之を次回に移すの止むなきに至る。本講の梗概は全部の講了を見たる後本誌上を以て紹介するの機あるべきを信ず。最後に来賓、農商務省工務局長岡実氏の「工場法に就て」の御講演あり。同氏が工場法に造詣の深きは一般に之を認むる処、今は即ち工場法の制定の緊要を説きて余蘊あるなし。右にて講演を了り、卓を囲み茶菓を喫して、談笑に入る。時に、上田先生新たに本年度役員として左の数氏を指名せらる。

加賀美　君（専二）　小平　省三君（専一）
松浦　要君（専一）　飯島　播司君（専一）
神村　貫治君（本三）　亀山　確郎君（本三）

薄暮散会す。

第七三号（明治四十四年十月）

(15) 故駒井先生の十周年忌に際して

講師　福田徳三

本年本月は恰も故駒井先生逝去の満十年に当るのである。予は謹んで茲に追慕の一文を草して、後来不知の一橋同人が特に此際先生を深く記念せらるゝ料と致したいと思ふのである。

我校は校長を送迎すること実に夥しかつた。其中我々一同が一様に名校長と認めて異論のなかつたは唯駒井先生一人あるのみである。矢野先生は無論名校長で偉勲を建てられた人である。乍去我一橋向上の大勢の趨く所を看誤つた為、晩年は殆んど全校の排斥反対の標的となられ、二十年苦心丹精の生児たる一橋と生き別れをされた。実に悲しむ可き所であつて、先生が我校を去られたは先生に取つては殆んど精神的の死であつた。爾来先生は志を世に絶ち、麻布の静居に高臥せられつゝ猶一念我校のことを忘るゝ能はず、時には夜半衾を蹴つて煩悶せられたこともあつたらうが、終に再び一橋へ帰ることなくして世を去られた。

予は先生の志を追憶する毎に胸の躍るを禁ずる能はざるものである。予は当時無論矢野排斥の一人で一生懸命に働いた。乍然先生其人を悪んだのではない。先生が一橋発展の大勢に逆行せらるゝを不可也としたのである。先生は主義の人であつた。而して又た主義に殉じた人である。唯時と共に推移することを解されなかつたは、実に先生の為に惜